

マックス・ウェーバー著、尾高邦雄訳「職業としての学問」を読む

- 学問とは何かを考える -

- ◆ いやしくも学問を自分の天職と考える青年は、かれの使命が一種の二重性をもつことを知っているべきである。というのは、かれは学者としての資格ばかりでなく、教師としての資格をもつべきだからである。 P.18
- ◆ 学問上の諸問題を、頭はあるが未訓練の人々に理解させ、かつ - - われわれにとってこれこそが大切なのであるが - - これらの問題をみずから考えていくように解説するということは、おそらく教育上もっとも困難な課題である。 P.20
- ◆ 学問がいまやかたつてみられなかったほどの専門化の過程に差しかかっており、かつこの傾向は今後もずっと続くであろう。こんにち何か実際に学問上の仕事を完成したいという誇りは、ひとり自己の専門に閉じこもることによってのみ得られるのである。 P.21
- ◆ 学問に生きるものは、ひとり自己の専門に閉じこもることによってのみ、自分のここにのちのちまで残るような仕事を達成したという、おそらく生涯に二度と味わえぬであろうような深い喜びを感じることができる。実際に価値ありかつ完璧(かんぺき)の域に達しているような業績は、こんにちではみな専門家的になしとげられたものばかりである。 P.22
- ◆ いやしくも人間としての自覚のあるものにとって、情熱なしになしうるすべては、無価値である。
- ◆ 情熱は、いわゆる「靈感」を生み出す地盤であり、そして「靈感」は学者にとって決定的なものである。 P.23
- ◆ 一般に思いつきというものは、人が精出して仕事をしているときにかぎってあらわれる。 P.24
- ◆ 情熱だけで思いつきを生み出すこともできない。作業と情熱とが - - そしてとくにこの両者が合体することによって思いつきをさそい出すのである。
- ◆ 「靈感」が与えられるかいなかは、いわゆる運(うん)しだいの事柄である。 P.25
- ◆ 情個性は体験からなり体験は個性に属する
- ◆ 学問の領域で「個性」をもつのは、その個性だけでなく、その仕事(ザッへ)に仕える人のみである。 P.27
- ◆ 自己を滅ぼしておのれの課題に専心する人こそ、かえってその仕事の価値の増大とともにその名を高める結果となるであろう。この点は、芸術家の場合と同じである。 P.28 ~ 29

- ◆ 学者の仕事は、つねに<sup>進歩</sup>すべく運命づけられている。 P.29
- ◆ 学問のばあいは、自分の仕事が 10 年たち、20 年たち、また 50 年たつうちには、いつか時代遅れになるであろうことは、誰でも知っている。 P.29 ~ 30
- ◆ ここにこそ学問的業績の<sup>意義</sup>は存在する。 P.30
- ◆ 学問上の「達成」はつねに新しい「問題提出」を意味する。  
それは他の仕事によって「打ち破られ」、時代遅れになることをみずから<sup>欲</sup>するのである。 P.29
- ◆ われわれ学問に生きるものは、後代の人々がわれわれより高い段階に到達することを期待しないで仕事をすることができない。原則上この進歩は無限に続くものである。 P.30
- ◆ 率直な知的廉直の義務。
- ◆ 自己の究極の立場の決定について自己の宿命を見極めるといふ勇氣、義務。
- ◆ 教室のなかではなんといっても率直な知的廉直以外の徳は通用しない。 P.78
- ◆ いたずらに待ちこがれているだけではなにごとにもなされない。自分の仕事に就き、そして「日々の要求」に - - 人間関係のうえでもまた職業のうえでも - - 従おう。このことは、もし各人がそれぞれの人生をあやつっている守護霊(デーモン)をみいだしてそれに従うならば、容易にまた簡単におこなわれうるのである。 P.74

マックス・ウェーバー著、尾高邦雄訳「職業としての学問」  
岩波文庫、岩波書店 1936 年 7 月 15 日刊  
- 2006 年 9 月 11 日記 -